

原 著

小児正常眼における散瞳前後の前眼部の観察

土 屋 綾 子

横浜市立大学大学院医学研究科 視覚器病態学

要 旨: 小児の前眼部構造の発達や特徴を正確にかつ客観的に把握することを目的として、全身麻酔下で手術を行った小児正視眼66例66眼に対し、超音波生体顕微鏡を用いて前房深度、隅角角度の測定を行った。また、成人正視眼15例15眼でも同様に測定を行い、比較検討した。さらに、小児の症例31例31眼に対しては、散瞳前後での前房深度、隅角角度の変化を検討した。小児と成人を比較した結果、前房深度に有意差はみられなかったが、隅角角度は小児のほうが有意に広がった。小児の散瞳前後の前房隅角の比較では、前房深度は散瞳後に有意に広くなり、隅角角度は大きな変化はないことがわかった。これらの結果より、小児の前房隅角は広く保たれており、散瞳後も狭くなることはないことが示唆された。

Key words: 前房深度 (Anterior chamber depth), 隅角角度 (trabecular-iris angle), 小児 (children), 散瞳 (pupil dilation), 超音波生体顕微鏡 (ultrasound biomicroscopy)
